

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	海外の森林・林業とフォレスター研修・研究プログラム	
学部・研究科名	農学部	
プログラム実施期間	2019年9月13日～9月24日	
研修先(国・都市・施設名)	ドイツ・バーデン＝ビュルテンブルク州・ロッテンブルク林業大学他	
	参加学生数 5名	知の森からの支援者数 0名
プログラム概要	このプログラムは国内の複数の大学の森林・林業関係の学部の学生が参加する形式で11年間継続されており、信州大学は6年前から参加している。ドイツは林業先進国であると同時に環境先進国でもある。そのため林業においても環境に配慮した施業体系の構築や機械開発が行われており、また市民向け森林教育も盛んである。そこで本プログラムでは、主に生態系管理、森林利用および森林教育の3つの観点から8つの研修先を設定した。研修先によって生態系管理の探索や労働安全性の確保、再生エネルギーの活用、教育の高度化など多面的な高度化が図られる一方で、いずれにおいても持続可能開発を強く意識し、実践していることが学べた。	

実施状況・成果

2019年9月15日から22日までの8日間、ドイツ南部バーデン＝ビュルテンブルク州において森林・林業研修を実施した。ドイツは林業先進国であると同時に環境先進国でもある。そのため林業においても環境に配慮した施業体系の構築や機械開発が行われており、また市民に対する森林教育も盛んである。そこで本プログラムでは、主に生態系管理、森林利用および森林教育の3つの観点から8つの研修先を設定した。

生態系管理については、協定校であるロッテンブルク林業大学、野生動物保護区、シュトゥットガルト市有林を訪問した。被害が急増しているキクイムシによる大径木の枯死、シカによる更新阻害が共通した話題として挙げられた。いずれの研修先においても、森林保全と木材生産のバランスに基づいた持続的な管理を目指していた。森林利用について訪問した小松フォレストおよびエヒルテ製材所では、IT化や作業効率の向上だけでなく、作業者の安全性や快適性の確保、環境に配慮したデザインや循環型エネルギー利用が持続的な開発につながる事が主張された。森林教育については、森の家、林冠タワー、素足公園、自然保護地域を訪問したが、いずれも体験型学習施設であり、バリアフリー化によって世代を超えて市民が参加できることが共通していた。またドイツでは環境教育そのものが持続可能性の実現に必要であるという認識がされており、森林・林業省庁と教育省庁の協働が実現していた。

このように、それぞれの研修先で追及されている項目は、生態系マネジメントの導入、作業者の安全性・快適性の確保、循環型エネルギー利用の促進、森林教育の高度化など極めて多面的であるが、いずれにおいても「持続的開発」のキーワードが共通して挙げられた。すなわち、ドイツ林業の実態を学びつつも、その将来が持続可能性に向かっていることを体感できた点が、本プログラムに参加した学生にとって最も有意義な点であった。

学生の声①-農学部 学生

今回ドイツ研修に赴いて最も印象に残ったことは現地での森林に対する関心の高さでした。無論、現地での様々な取り組みにも大きな感銘を受けましたが、それらを可能にしている要素を考えた時、やはり住民のそういった活動に対する理解があるからこそ成り立っているのではと感じました。今後今回見学する事の出来たシステムや考え方の日本への導入が検討される機会もあるかもしれません。そのような時、両国の国民の森林に対する意識の相違が大きなファクターとして浮上してくるのではないかと感じました。

学生の声②-農学部 学生

約1週間のプログラムでした。森林教育や国立公園、林業、狩猟など幅広いテーマで毎日違う現場に行きドイツの森林と人の繋がりを学びました。五感を活用した見学や体験が多く、座学だけではわからないことも学べたと思います。日本とドイツを比較して立地的な森林の違いはもちろん、人々の森林との向き合い方も異なっていることがわかりました。驚いたのは森林に関わる仕事をしている人達が、市民と森を「繋げる」ということをかなり重視していたことでした。市民が誰でも森林のことを学べる施設や展示が多くあり、こうすることが市民一人一人の森林や環境への意識を高くしている要因なのかもしれないと感じました。

Haus des Waldesでは教育省と森林省の連携によって森林教育の高度化と普及を実践する ドイツ語圏大手の林業機械メーカー「Komatsu Forest」の開発目標は効率性・安全性・快適性・低環境負荷である

